

# 上位目標達成を通じた集団間の メタステレオタイプと社会的アイデンティティ

——仮想世界ゲームにおける優位集団・  
劣位集団間の相互観察

野波 寛\*  
加藤 潤三\*\*  
岡本 卓也\*  
藤原 武弘\*

## ■要 旨

上位目標が導入された文脈では集団間での相互観察を通して、内集団に対する外集団メンバーからの評価、すなわちメタステレオタイプが生起する。鏡映自己による自己確認は個人アイデンティティ確立に際しての要因のひとつだが、これと同様な過程として、集団間関係におけるメタステレオタイプは内集団の受容と社会的アイデンティティの安定につながるだろう。優位集団メンバーではメタステレオタイプと社会的アイデンティティは相関しないが、劣位集団メンバーではこの2変数はむすびつくとも予測できる。“Simulated International Society Game”を用いた実験の結果は、これら2つの仮説を支持した。これをもとに、メタステレオタイプと社会的アイデンティティとのつながりの探索が集団認知の研究へおよぼす寄与について考察した。

キーワード：上位目標、メタステレオタイプ、社会的アイデンティティ、SIMIN-SOC

\*関西学院大学  
\*\*大阪国際大学

## 1 問題

本研究では、上位目標達成をめざす協働の過程での優位集団および劣位集団メンバー間の相互観察と、それぞれの社会的アイデンティティとの関連について分析する。

Sherif & Sherif [1969] 以来、複数の集団の協働によって達成可能な上位目標の導入は、集団間葛藤を低減させる有効な手段とされてきた。Turner [1981] は、上位目標達成に向けた集団間の協働が内集団－外集団の境界を弱め、内集団のみならず外集団まで含めた上位アイデンティティが形成されることで、集団間葛藤が低減すると述べる。上位目標の導入による内集団バイアスや外集団差異化の低下、集団間での協調行動の増大などはこれまでいくつの実験で確認され、Turner [1981] の提起に対する実証が得られてきた ([Brewer & Miller, 1984; Kramer & Brewer, 1984] など)。

一方、単に上位目標を導入するのみでは集団間葛藤の低減には不十分であり、その遂行にあたって集団間での役割分担が重要であるという知見も見られる ([Deschamps & Brown, 1983; Brown & Wade, 1987] など)。Brown & Wade [1987] では、上位目標の達成をめざして協働する2集団間で役割分担がなされていた場合、こうした役割分担に関する教示がおこなわれなかった場合よりも、外集団に対する好意的な評価が増大したと報告されている。また加藤ら [加藤ほか, 2001, 2002] も、上位目標の達成に必要なコストの分担が集団間で衡平配分的に合意されていなければ、上位目標そのものは達成されてもむしろ外集団に対する好意的評価が低下する場合があることを明らかにした。さらに、外集団認知のみならず、内集団への認知に関しても、たとえば上位目標達成に対する内集団の寄与への評価が、集団間格差によって左右されることが示されている (たとえば、[Deschamps & Brown, 1983; Brown & Wade, 1987])。

上位目標の遂行という状況は、メンバーの単純接触や協働を通じて集団間葛藤が軽減される可能性がある一方で、上位目標の達成にそれぞれの集団が果たした役割や寄与の程度が、相互観察される場でもある。すなわち、上位

目標遂行の過程で集団メンバーは内集団が果たした役割や寄与を観察・評価すると同時に、外集団の役割や寄与に対しても同様に観察・評価をおこなう。上位目標の遂行を通じた内集団・外集団に対する個人の態度の変化には、こうした内集団・外集団それぞれの役割と寄与に対する評価の比較過程が重要な影響を及ぼすと考えられる [加藤ほか, 2001, 2002]。

ところで、上位目標が導入された文脈下で生じる集団間の相互観察は、さらにもうひとつの認知過程をメンバーに発生させると予測できる。内集団の果たした役割や寄与が、内集団メンバーのみならず外集団メンバーからも観察・評価されるであろうという予測である。すなわち、内集団および外集団に対する個人の評価とともに、内集団に対する外集団メンバーからの評価を予測する過程が、集団メンバーには発生するであろう。

外集団メンバーによってなされる内集団への評価の予測は、メタステレオタイプの概念とも一致する側面がある [Vorauer et al., 1998 ; Klein & Azzi, 2001]。メタステレオタイプとは「自己の所属する内集団について外集団のメンバーがもっていると予測されるステレオタイプに関する個人の信念」 [Vorauer et al., 1998] と定義され、狭義には外集団から内集団に向けられたステレオタイプ視の予測を指す。最小集団パラダイムを用いた宮原・山岸 [2004] によれば、個人に発生するこうした狭義のメタステレオタイプは、その個人自身が外集団をステレオタイプの的に評価する傾向よりも顕著であるという。ただし本研究で焦点となる上位目標遂行の場面では、こうしたステレオタイプ視の予測のみならず、集団間協働に際しての内集団の役割や寄与といったより多様な側面での評価の予測が、内集団に対する外集団からの評価として重要になるであろう。したがって本研究では、メタステレオタイプの概念を外集団からのステレオタイプ視の予測と固定せず、上位目標遂行における内集団の役割や寄与を踏まえた上での外集団メンバーからの多様な評価の予測として、より広義にとらえる。

本研究で焦点となるのは、内集団に対する個人自身の評価と、広義のメタステレオタイプとして位置づけられた内集団に対する外集団からの評価の予測が、社会的アイデンティティにつながる過程である。社会的アイデンティ

ティ理論は、内集団に対する個人の社会的アイデンティティを、自己表象 (self-definition) における内集団の重要性として定義する (たとえば、[Tajfel, 1981 ; Turner et al., 1987 ; Tropp & Wright, 2001 ; McCoy & Major, 2003])。個人が主観的に内集団の評価を向上させることは、社会的アイデンティティを肯定的に高揚させ、自己表象を安定化させる有効な方略となり得る [Taylor & McKirnan, 1984]。一方、自己表象においては個人アイデンティティも重要となるが、この安定化には、自分自身による自己への評価のみならず、自己に対して他者から向けられる評価の予測 (鏡映自己) を通じた自己確認の過程があるとされる [Mead, 1934]。鏡映自己を通じた自己確認と同様の過程が社会的アイデンティティの成立にも作用すると考えた場合、内集団に対する他者からの肯定的な評価、あるいは肯定的な評価への期待が、個人にとって社会的アイデンティティの受容につながる可能性も指摘できる。すなわち、内集団に対する個人自身の評価と、内集団に対する外集団メンバーからの評価の予測は、いずれも個人の社会的アイデンティティの基盤になり得ると予測できる。上位目標の導入下における集団間協働の場は、先に述べたように個々の集団の役割や寄与に対する集団間での相互観察が顕在化するため、内集団に対する外集団メンバーからの評価の重要性が増大する文脈のひとつと考えられるだろう。

ところで、複数の集団が上位目標に取り組む際、重要な要因として集団間の格差に注意を払わなければならない。上位目標の導入は集団間の境界を弱めるとされるが [Turner, 1981]、上位目標遂行に際して集団間格差があると、むしろ境界が強化されるケースも見られる。Brown & Wade [1987] では、上位目標の遂行能力に格差を設けられた2つの集団で、優位集団メンバーが劣位集団メンバーよりも強い内集団ひいきを示したと報告している。集団間格差にもとづく集団間境界の強化は、集団間比較の過程が作用する内集団評価を優位集団・劣位集団のそれぞれで発生させるだろう。このとき、おのおのの集団のメンバーには、上方比較・下方比較に応じて異なった内集団評価が発生する可能性がある。さらにまたメンバー自身の内集団評価と同様、内集団に対する外集団からの評価の予測にも、上方比較・下方比較によ

って優位集団・劣位集団の間で相違が生じるとも考えられる。

狭義のメタステレオタイプが個人の社会的アイデンティティに及ぼす影響を検討した Klein & Azzi [2001] によれば、ネガティブなメタステレオタイプ（外集団メンバーによって、内集団がネガティブにステレオタイプ視されているだろうとの主観的予測）は内集団に対する脅威となり、個人にとっての内集団の受容や外集団との関係構築の上で、好ましくない影響を及ぼすという。また、劣位集団のメンバーは内集団に対する優位集団からのステレオタイプ視を予測することで、内集団の地位に関する不合理感や罪悪感を生起させるといわれる [Crocker et al., 1998]。

本研究では以上の知見を踏まえ、上位目標の遂行能力に構造的格差を設定された優位集団・劣位集団において、メンバー自身による内集団への評価、および外集団メンバーによる内集団への評価の予測と、メンバーの社会的アイデンティティとの関連を検討する。ここで重点となるのは、外集団メンバーによってなされる内集団への評価の予測である。これについて、本研究では次のような側面から考察をおこなった。

自己確証理論（self-verification theory）によれば、個人は自分自身についての高揚的なフィードバックのみを単純に求めるわけではなく、ネガティブな評価であっても自分自身の自己概念に一致した情報を積極的に取り入れるとされる [Swann et al., 1989, 2000]。たとえば、ネガティブな自己観をもたざるを得ない領域（不得意分野）では、個人は自己についての好ましくない情報を積極的に選好する [Swann et al., 1989]。すなわち、自己に対する他者からのネガティブな評価も、ときに個人は自己表象の安定化のため積極的に受け入れるのである。

内集団への評価を媒介とした社会的アイデンティティの成立に際しても上記と同様な過程が作用すると仮定した場合、内集団に対する外集団メンバーからの評価の予測は、それがネガティブなものであっても、メンバーによる社会的アイデンティティの受容につながると考えられる。ただし優位集団のメンバーは、上位目標を達成する際の構造的な優位性が確立されているため、社会的アイデンティティを受容する上で外集団（劣位集団）からの評価

の重要性は、相対的に低下する。当該の集団間関係の中で客観的に優位な位置を占める集団に自己が所属しているという認知は、そのみで彼らが社会的アイデンティティを受容する基盤となり得るだろう。したがって優位集団のメンバーにおいては、内集団に対する劣位集団からの評価は社会的アイデンティティにむすびつかないと予測できる（仮説1）。

一方、上位目標の遂行能力を構造的に低く設定された劣位集団のメンバーは、内集団の寄与が外集団（優位集団）よりも低いと自己評価せざるを得ない。また同時に、優位集団のメンバーからもそのように内集団の寄与を低く評価されるだろうとの予測が成立する。しかし、構造的格差として内集団の能力を低く設定された領域でのネガティブな外的評価は、劣位集団のメンバーにとって内集団への脅威とはならず、先述のように、むしろその評価を受容する傾向が生じるだろう。すなわち、劣位集団メンバーにおいては、上位目標遂行の過程での優位集団からの評価が、内集団へのアイデンティティにむすびつくると予測できる（仮説2）。

本研究では以上の仮説を検討するため、構造的格差を設けられた集団間に葛藤・協調を発生させる実験ゲーミングである仮想世界ゲーム（SIMIN-SOC: Simulated International Society Game）を実施した。仮想世界ゲームは、経済的な基準で優劣に分けられた4つの集団間で生じる葛藤と協調をシミュレートしており、南北格差や環境汚染といった地球規模の問題を単純な形で再現した実験・教育用ゲーミングとされる [広瀬, 1997]。このゲームを用いたいくつかの実験からはリーダーシップや集団認知に関する知見が報告されており ([加藤ほか, 2001, 2002; Karasawa et al., 2004] など)、集団間関係を扱う実験用ゲーミングとしての有効性が確認されている。このゲームで生じる環境問題は、優位集団・劣位集団が共同で解決にあたらなければ双方とも大きな損害を被る上位目標と位置づけられる。ただしその際、経済的に優位な位置にある優位集団は、環境問題の解決に必要な資金を劣位集団よりも相対的に多く出資できる。すなわち、上位目標の遂行能力において優位集団と劣位集団の間には構造的な格差が設定されていた。また、SIMIN-SOCはその実施手順上、環境問題が発生する前に優位集団・劣位集団間で一定の

集団間関係が構築され、環境問題の発生後にこの構造が変化するというパターンをとる。したがってこのゲームでは、集団間関係に対する上位目標導入の影響を検討する上で、Sherif & Sherif [1969] の観点にもとづく時系列的分析をおこなうことが可能であった。

本研究では以上の点をふまえ、優位集団・劣位集団それぞれの内集団評価とメタステレオタイプ、およびそれらと社会的アイデンティティの関連に上位目標の遂行を通じて現れる変化について、SIMINSOC を用いた時系列的分析によって明らかにする。

## 2 方 法

### 2.1 SIMINSOC における集団間格差と上位目標

本研究で実施した SIMINSOC の概要は広瀬 [1997] や杉浦・広瀬 [1997] にくわしい。ここでは、本研究と関連の深いゲーム中の集団間格差の設定と上位目標の導入について述べる<sup>1)</sup>。

### 2.2 集団間格差

SIMINSOC では、およそ 40 名の参加者が 10 名ずつ 4 つの集団に配分される。このうち、優位とされる 2 つの集団には、参加者がゲームを勝ち抜く上で不可欠の資源である資金と食料を生産する企業と農園が設定されている。しかし、劣位とされる残る 2 つの集団には、企業・農園ともに設定されず、したがってこの 2 つの集団は資金と食料を自力で生産する手段がとばしい。また、参加者にはゲーム開始当初に個人で自由に処分可能な資産として一定の資金が与えられるが、優位集団に配置された参加者には、劣位集団メンバーの 2 倍の資金が与えられた。したがって優位集団と劣位集団の格差は、集団の生産能力、およびゲーム開始時におけるそれぞれの集団メンバーの個人資産という 2 点によって設けられていた。後述のようにこの集団間格差は、上位目標である環境問題にあたる際、優位集団と劣位集団それぞれの解決能力に直接かかわる要因となった。

## 2.3 上位目標

SIMINSOC では個々のメンバーや集団が個人間・集団間での交渉を繰り返しつつ、おのおの自己利益の最大化を目指す。先述した企業や農園はこのための手段として活用され、拡大再生産が図られる。しかしその結果として、特定の個人や集団のみでは解決不可能な課題が、ゲーム中（主としてゲーム後半）に発生する。この課題は環境問題としてゲーム参加者全員に教示された。この解決には優位集団・劣位集団が合意の上で一定の資金を拠出することが求められ、もし解決できなかった場合、ゲーム参加者の半数が優位集団・劣位集団を問わずランダムにゲームから除外されることになっていた。4つの集団すべてが協働して解決にあたらなければならず、解決できなかった際にはその不利益がやはり4集団すべてにかかることから、ゲームにおける環境問題は上位目標と位置づけることができる。課題の構造上、環境問題の発生に対する責任は、企業と農園をもつ優位集団のほうが劣位集団よりも大きい。その一方、優位集団はより多くの資産を保有するため、環境問題の解決に貢献する能力も高いことになる<sup>2)</sup>。

## 2.4 ゲーム参加者

ゲームは4回実施され、合計158名（男性63名、女性95名）の大学生が参加した。

## 2.5 従属変数

ゲーム中、上位目標である環境問題の発生前と発生後の2回にわたって質問紙を配布し、以下の変数を測定した。

## 2.6 内集団の責任と貢献

SIMINSOC において上位目標となる環境問題を通じた内集団・外集団の評価には、問題の発生に対する集団の責任と、解決に対する貢献への評価が含まれる[加藤ほか, 2001, 2002]。これをもとに本研究では、環境問題の発生に対する内集団の責任と解決への貢献を、それぞれ「まったく責任がな



「非常に責任がある」「まったく貢献しなかったー非常に貢献した」（いずれも 5 段階評価）という項目で測定した。

## 2.7 外集団からの評価の予測

優位集団のメンバーに対しては、内集団に対する劣位集団メンバーからの評価の予測を、「総合的にみて自分たちの集団は、劣位集団から何点と評価されていると思うか」という問で、0～100 点の範囲で回答させた。同様に劣位集団メンバーには、内集団に対する優位集団メンバーからの評価を、やはり 0～100 点で予測させた。

## 2.8 社会的アイデンティティ

「内集団の目的が達成されると、自分自身の目的が達成されたように感じる」「この集団の一員であることは、ゲーム世界で自分の意見を決めるとき、大事な要素だ」など 5 項目を設置した。すべて「まったくそう思わないー非常にそう思う」という 5 段階評価であった。

# 3 結 果

実施された 4 回のゲームのうち、第 1 回から第 4 回までのゲーム（最小 36 名～最大 43 名）の間で男女比に差異はなかった ( $\chi^2[3]=1.46, n.s$ )。また、優位集団 ( $N=78$ )・劣位集団 ( $N=78$ ) の間でも、男女比に偏りは見られなかった ( $\chi^2[1]<1.00, n.s$ )。

## 3.1 各変数の推移

内集団の責任および貢献に対する評価、内集団に対する外集団からの評価に対する予測、ならびに社会的アイデンティティのそれぞれに関して、集団 (2; 優位・劣位)×セッション (2; 環境問題発生前・後) の分散分析 (混合計画) をおこなった。

まず責任評価に関しては、集団の主効果 ( $F[1, 156]=118.44, p<.001$ )、

セッションの主効果 ( $F[1, 156]=9.10, p<.01$ )、交互作用 ( $F[1, 156]=11.01, p<.01$ ) のいずれも有意となった。図1は、内集団の責任に対する評価の推移を示している。下位検定をおこなったところ、環境問題発生の前後でいずれも、優位集団メンバーは環境問題発生に対する内集団の責任を劣位集団メンバーよりも高く評価していた (環境問題発生前  $F[1, 156]=38.40, p<.01$ ; 環境問題発生後  $F[1, 156]=84.50, p<.01$ )。また優位集団メンバーは、環境問題の発生前から発生後にかけて、内集団責任評価が高まった ( $F[1, 156]=20.08, p<.01$ )。しかし劣位集団メンバーには、このように環境問題発生の前後にかけて内集団の責任評価が変化する傾向は見られなかった ( $F[1, 156]<1.00, n.s$ )。

内集団の貢献評価に関しても、集団の主効果 ( $F[1, 156]=30.89, p<.001$ )、セッションの主効果 ( $F[1, 156]=81.72, p<.001$ )、交互作用 ( $F[1, 153]=23.55, p<.001$ ) いずれも有意と認められた。内集団貢献評価の推移は図2に示すとおりである。下位検定の結果、環境問題発生前においては、内集団の貢献評価に優位集団メンバー・劣位集団メンバーの間で差異は見られなかった ( $F[1, 156]<1.00, n.s$ )。しかし環境問題発生後には、優位集団メンバーの内集団貢献評価が劣位集団メンバーの内集団貢献評価よりも

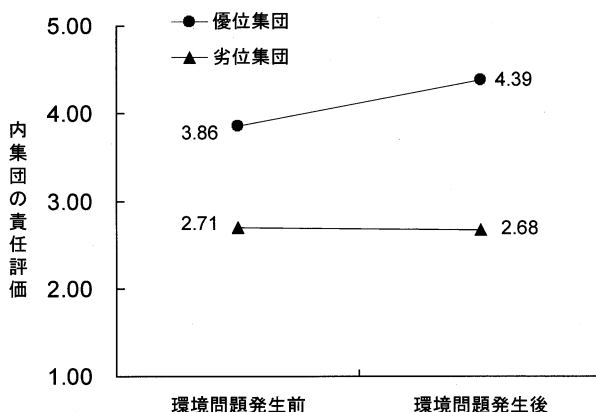


図1 共通課題 (環境問題) に対する内集団の責任評価  
注) 数値は平均値

高くなった ( $F[1, 156]=47.42, p<.01$ )。また、優位集団メンバー・劣位集団メンバーのいずれも、環境問題の発生前よりも発生後のほうが、内集団貢献評価が高かった (優位集団  $F[1, 153]=93.85, p<.01$ ; 劣位集団  $F[1, 153]=9.67, p<.01$ )。

図3に示したのは、内集団に対する外集団からの評価の予測である。これに関しては集団の主効果のみ有意であり ( $F[1, 155]=40.79, p<.001$ )、

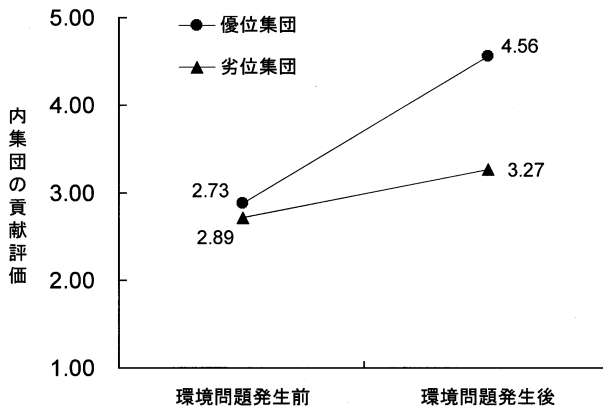


図2 共通課題（環境問題）に対する内集団の貢献評価  
注) 数値は平均値

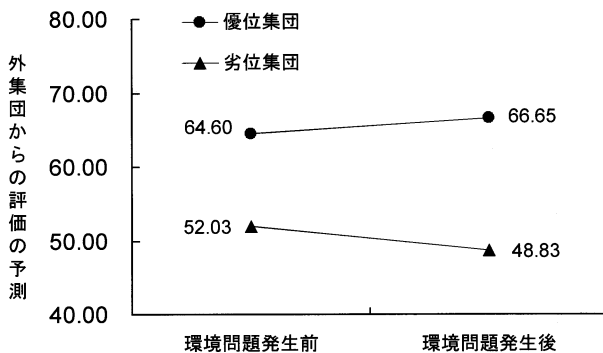


図3 内集団に対する外集団からの評価の予測  
優位集団：内集団に対する劣位集団からの評価の予測  
劣位集団：内集団に対する優位集団からの評価の予測  
注) 数値は平均値

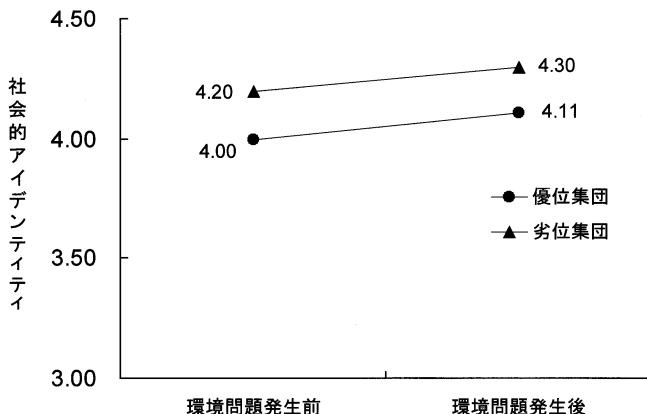


図4 社会的アイデンティティに関する5項目の単純加算平均値

セッションの主効果および交互作用はいずれも有意ではなかった（それぞれ  $F[1, 153] < 1.00, n.s$  ;  $F[1, 153] = 3.08, n.s$ ）。環境問題発生の前後を通じ、優位集団メンバーは劣位集団メンバーよりも内集団への評価を高く予測していた。

社会的アイデンティティに関する5項目（ $\alpha = 0.84$ ）については、図4に示した単純加算平均値をもとに分析をおこなった。これには集団の主効果（ $F[1, 156] = 4.33, p < .05$ ）およびセッションの主効果（ $F[1, 152] = 5.96, p < .05$ ）が認められ、交互作用は有意とならなかった（ $F[1, 152] < 1.00, n.s$ ）。環境問題発生の前後いずれでも劣位集団メンバーの社会的アイデンティティは優位集団メンバーよりも高かった。また、優位集団・劣位集団ともに、メンバーの社会的アイデンティティは環境問題発生前から発生後にかけて高揚した。

### 3.2 変数間の関連

内集団の責任・貢献に対する評価、内集団に対する外集団からの評価の予測という各変数と社会的アイデンティティとの関連を検討するため、優位集団・劣位集団のおのおのにおいてこれらの変数間の偏相関係数を算出した。表1と表2は、それぞれ優位集団・劣位集団における環境問題発生前後で

表 1 優位集団における変数間の偏相関係数

		外集団からの 評価の予測	内集団の責任 評価	内集団の貢献 評価
環境問題 発生前	社会的アイデンティティ	.02	-.02	.11
	外集団からの評価の予測		.09	.03
環境問題 発生後	社会的アイデンティティ	.01	-.17	.17
	外集団からの評価の予測		-.28*	.05

注) \* $p < .05$ , + $p < .10$

表 2 劣位集団における変数間の偏相関係数

		外集団からの 評価の予測	内集団の責任 評価	内集団の貢献 評価
環境問題 発生前	社会的アイデンティティ	.05	.10	-.07
	外集団からの評価の予測		-.20+	.22+
環境問題 発生後	社会的アイデンティティ	.269*	-.22+	.11
	外集団からの評価の予測		-.15	.28*

注) \* $p < .05$ , + $p < .10$

の偏相関係数を示したものである。

環境問題発生前、すなわち優位集団・劣位集団のメンバーが協働して上位目標を遂行する前の段階では、いずれの集団のメンバーにおいても、社会的アイデンティティと有意な相関をもつ変数は見出されなかった。しかし環境問題が発生した後の段階では、まず優位集団メンバーにおいて、内集団に対する外集団（劣位集団）からの評価の予測と、内集団の責任評価との間に、負の相関が認められた（ $r[77] = -0.28$ ,  $p < .05$ ）。すなわち優位集団メンバーは、環境問題の発生に対する責任評価が高い場合、内集団が劣位集団メンバーから低く評価されているだろうとの予測をおこなったことになる。ただし優位集団メンバーにおいては、環境問題発生の前後を通して、社会的アイデンティティと有意な相関をもつ変数は認められなかった。これに対して劣位集団メンバーでは、環境問題の発生後、外集団（優位集団）による内集団への評価の予測と社会的アイデンティティとの間に、有意な相関が見られた（ $r[77] = 0.27$ ,  $p < .05$ ）。優位集団メンバーによって内集団が高く（低く）評

価されていると予測した場合、彼らはより高い（低い）アイデンティティを内集団に対してもつことが示された。また、優位集団からの評価の予測と、内集団の貢献に対する評価との間にも有意な相関が認められた ( $r[77] = 0.28, p < .05$ )。劣位集団メンバーは、上位目標である環境問題の解決に向けた内集団の貢献が大きいと評価した場合、優位集団によって内集団がより高く評価されるだろうとの予測をおこなっていた。

## 4 考 察

上位目標の達成を目指す集団間協働の過程では、優位集団・劣位集団のメンバーは内集団の責任や貢献に対する評価のみならず、外集団の責任や貢献に対する評価も顕在化させる。こうした集団間での相互観察の場におけるメンバーの社会的アイデンティティは、内集団に対する個人自身の評価のほか、内集団に対する外集団からの評価の予測とも、なんらかの関連をもつと考えられる。ただし優位集団メンバーの場合は、構造的に優位な集団への所属それ自体が彼らの社会的アイデンティティの基盤となるので、劣位集団による内集団への評価の予測は、アイデンティティとのつながりが低いだろう（仮説1）。一方で劣位集団メンバーの場合、内集団に対する優位集団からの評価の予測は、内集団に対する彼らのアイデンティティにむすびつくだろう（仮説2）。上位目標として環境問題を組みこんだ SIMINSOC [広瀬, 1997; 杉浦・広瀬, 1997] を実施し、内集団評価や社会的アイデンティティを環境問題発生の前後で比較する時系列的分析をおこなって、この2つの仮説を検討した。

環境問題の発生に関する優位集団メンバーの内集団責任評価および解決への貢献評価は、いずれも劣位集団メンバーによる内集団責任評価・貢献評価よりも高かった。SIMINSOC における優位集団・劣位集団の格差は、集団の生産能力と集団メンバーの個人資産によって設定されている。生産能力の高い優位集団は環境問題発生への寄与が劣位集団より大きく、その一方で問題の解決能力も高かった。優位集団・劣位集団の間で内集団責任評価と貢献

評価に上記のような差異が見られたことは、SIMINSOC における集団間の構造的格差を反映した結果といえる。とくに、優位集団メンバーにおいて内集団責任評価・貢献評価がともに環境問題発生後に上昇したことは、上位目標としての環境問題の発生・解決に対する内集団の関与を、優位集団メンバーが劣位集団メンバーよりも大きくとらえていたことのあらわれと解釈できるだろう。

優位集団メンバーにおける外集団（劣位集団）メンバーからの内集団への評価の予測、ならびに劣位集団メンバーにおける外集団（優位集団）メンバーからの評価の予測、この2つに関しては、環境問題発生の前後を通して前者のほうが後者よりも高かった。一方、内集団へのアイデンティティは、優位集団メンバーよりも劣位集団メンバーにおいて高いという結果が得られた。

優位集団メンバーでは、環境問題発生の前後を通じ、内集団責任評価と貢献評価、および外集団（劣位集団）メンバーによる内集団への評価予測のいずれにも、社会的アイデンティティと相関を示す変数は見られなかった。内集団に対する外集団からの評価予測と社会的アイデンティティとの関連が認められなかったことは、当初の仮説1を支持する結果といえる。一方、劣位集団メンバーにおいては、内集団に対して外集団メンバーからおこなわれる評価の予測が社会的アイデンティティと有意に相関しており、仮説2が支持された。劣位集団におけるこの2変数間の相関は、環境問題発生前では有意とならず、環境問題が発生した後の段階でのみ有意であった。すなわち、劣位集団メンバーが社会的アイデンティティを受容する上で、内集団に対する優位集団メンバーからの評価がより重要になるのは、上位目標を遂行するために優位集団メンバーとの協働がなされた段階においてであり、集団間の相互観察による影響が大きいことが示唆される。

外集団による内集団への評価に対する主観的な予測は、本研究では広義のメタステレオタイプと定義されていた。従来、Vorauer et al. [1998] や Klein & Azzi [2001]、あるいは宮原・山岸 [2004] などはメタステレオタイプそのものの構造や発生経緯を主に検討しているが、これが個人の社会的アイデ

ンティティとどのようにつながるかという問題には、くわしく言及してこなかった。近年ではメタステレオタイプによるアプローチとは別に、とくに劣位集団メンバーにおける社会的アイデンティティの危機に焦点をあて、アイデンティティへの脅威に対する彼らの対処方略を分析する研究が見られる。たとえば、外集団メンバーによって内集団へ不当な評価を与えられた場合、劣位集団メンバーは内集団の均質性を高く認知する [Branscombe et al., 1999]、内集団バイアスを増大させる [Jetten et al., 1997; Cadinu & Cerchioni, 2001]、劣位とされる比較次元から異なる次元での内集団評価を高揚させる [Karasawa et al., 2004] など、多様な認知の方略で内集団へのアイデンティティを防衛するという。

本研究ではメタステレオタイプの構造や発生経緯、あるいはそれへの対処方略ではなく、自己確証理論 [Swann et al., 1989, 2000] を援用した上で、メタステレオタイプと社会的アイデンティティとの関連に焦点をあてた。鏡映自己が個人アイデンティティの安定化に影響を及ぼすように、外集団メンバーの目に映る内集団のイメージの予測も、人々の社会的アイデンティティに影響を及ぼすだろう。自己表象には、他者の認識を通して形成される客我 (me) がある [Mead, 1934]。これと同様な過程が、内集団への評価を媒介として、自己表象の一部である社会的アイデンティティにも作用している可能性がある。社会的アイデンティティの発生基盤を検討する上で今後の課題のひとつであろう。

本研究は、とくに劣位集団メンバーにおいて社会的アイデンティティとメタステレオタイプがつながりやすいことを示唆した。本研究で実施された SIMINSOC のゲーミング状況においては、生産手段のとぼしい劣位集団はメンバーの利得を確保する上で優位集団に依存する側面が多かった。こうした依存関係の中では、自己の集団が優位集団からどのように見られているかという問題が劣位集団メンバーにとって心理的により重大なものとなるだろう。また、利得確保のため劣位集団メンバーには優位集団メンバーとの対人的折衝が不可欠となり、実際にゲーム中は多くの場面で集団間交渉が発生した。SIMINSOC における集団間交渉を検討した垂澤ほか [2001] では、集



団交渉への参加を通じて劣位集団メンバーの社会的アイデンティティが高揚したことが報告されている。集団間交渉は、共通目標遂行のために集団内でメンバーが協働する集団行動のひとつである。これへの参加は集団内におけるメンバー間での相互観察をうながし、先に述べた鏡映自己の予測が自己表象の安定化をもたらす過程を経て、メンバーの社会的アイデンティティを高揚させたとも考えられるだろう。所属集団の異なるメンバー同士が協働する上位目標遂行という場合、個人間ではなく集団間の相互観察が契機となって、内集団に対する外集団メンバーからの評価の予測が社会的アイデンティティにかかわる心理的過程を生起させると仮定できる。とくに、上位目標の遂行にあたって集団間格差が存在すると集団間の境界が強化されるため [Brown & Wade, 1987]、劣位集団のメンバーにとって内集団への評価がより重要になるのであろう。垂澤ほか [2001] は、優位集団メンバーでは集団行動への参加が彼らの社会的アイデンティティに影響を及ぼさなかったことも同時に報告しており、これらの結果は本研究での知見を支持するものといえる。

本研究での設定状況のように上位目標遂行に際して集団間格差があり、劣位集団が優位集団に依存しなければならない場合、劣位集団メンバーは内集団に対する優位集団メンバーからの評価を予測し、これが彼らの社会的アイデンティティの受容につながる。したがってこうした状況では、優位集団・劣位集団で協働する際に劣位集団の貢献を積極的にとりあげ、これを正当に評価し、劣位集団へフィードバックするシステムが必要であるといえよう。自己に対する他者からの評価がネガティブであった場合、人々は自己の肯定的イメージを維持するため、他者に対してステレオタイプを反映した偏見的な評価をおこなうといった報告がある [Fein & Spencer, 1997]。外集団メンバーに対する偏見的な評価は集団間葛藤の激化につながる可能性があり、これを低減させる上でも、劣位集団メンバーの社会的アイデンティティをポジティブに安定させる社会的基盤の整備は重要である。この点は、上位目標達成による上位アイデンティティの形成 [Turner, 1981] を通じた集団間葛藤の低減とは別に、今後の議論が求められる。またこのとき、本研究では優位

ないし劣位という格差のある外集団からの評価を社会的アイデンティティの基盤として取り上げたが、これと同様に格差のない外集団からの評価も重要な要因となる。格差のない集団同士が協働する文脈でのメタステレオタイプと社会的アイデンティティとの関連を検討することも、今後の課題である。

本研究で焦点となった社会的アイデンティティは、自己と内集団との重複性に対する認知として測定されていた。これは、社会的アイデンティティに対する認知的アプローチに沿った定義である。しかしこれとは別に、内集団への愛着や好意、内集団に付与されたプライドなど、情動的アプローチによる集合的自尊心 (collective self-esteem) として、自己表象における内集団の位置づけをおこなう研究もある ([Luhtanen & Crocker, 1992; Smith et al. 1999; Smith & Tyler, 1992; McCoy & Major, 2003] など)。Luhtanen & Crocker [1992] や McCoy & Major [2003] の検証では、社会的アイデンティティと集合的自尊心は相互に独立的な概念とされる。自己確証理論では他者による自己への評価と情動的な自尊心とのつながりが重視されており、これを生かした本研究の観点でも、今後はメタステレオタイプと集合的自尊心との関連を検討することが必要である。また本研究ではメタステレオタイプと社会的アイデンティティとの因果関係には踏みこまず、この2つの関連性についてののみ検討を加えた。社会的アイデンティティや集合的自尊心に対するメタステレオタイプの因果的な影響を検討することは、集団間での偏見や差別に関する研究に今後あらたな寄与をもたらすだろう。本研究での示唆をもとに、社会的アイデンティティや集合的自尊心、それらを防衛する個人の認知的・行動的方略とのつながりに、さらにメタステレオタイプの影響を視野にいれたモデルの構築が求められる。

#### 注

- 1) 本研究で実施された SIMINSOC は、優位集団・劣位集団の初期格差とともに、上位目標遂行に際しての集団間協働の必要性を強調したルールに改訂されていた。改訂ルールの詳細は加藤ほか [2005] を参照。
- 2) 実際に、本研究で実施された4回の SIMINSOC ではいずれも、環境問題発生の際に優位集団が拠出した解決資金は劣位集団の拠出した資金よりも多かった。

これらマクロなデータの詳細については加藤ほか〔2005〕を参照。

## 文献

- Branscombe, N., Ellemers, N., Spears, R., & Doosje, B., 1999, "The context and content of social identity threat," Ellemers, N., Spears, R., & Doosje, B. eds., *Social identity*, Oxford : Blackwell, 59–83.
- Brewer, M. B., & Miller, N. E., 1984, "Beyond the contact hypothesis : theoretical perspectives in desegregation," In Miller, N. E., & Brewer, M. B. eds., *Groups in conflict : The psychology of desegregation*, New York : Academic Press.
- Brown, R., & Wade, G., 1987, "Superordinate goals and intergroup behaviors : the effect role ambiguity and status on intergroup attitudes and task performance," *European Journal of Social Psychology*, 17 : 131–142.
- Cadinu, R. M., & Cerchioni, M., 2001, "Compensatory biases after ingroup threat : 'Year, but we have a good personality'," *European journal of social psychology*, 31 : 353–367.
- Crocker, J., Major, B., & Steele, C. M., 1998, "Social stigma," Gilbert, D. T., Fiske, S. T., & Lindzey, G. eds., *The handbook of social psychology*, 4<sup>th</sup>ed., Vol. 2, Boston : McGraw Hill, 504–553.
- Deschamps, C. J., & Brown, R. J., 1983, "Superordinate goals and intergroup conflict," *British journal of social psychology*, 22 : 189–195.
- Fein, S., & Spencer, J. S., 1997, "Prejudice as self-image maintenance : Affirming the self through derogating others," *Journal of personality and social psychology*, 73 : 31–44.
- 広瀬幸雄, 1997, 「仮想世界ゲームとは何か——ゲームのルールと実施の方法」広瀬幸雄編著『シミュレーション世界の社会心理学——ゲームで解く葛藤と共存』京都：ナカニシヤ出版, 11–25.
- Jetten, J., Spears, R., & Manstead, S. R. A., 1997, "Distinctiveness threat and prototypicality : Combined effects on intergroup discrimination and collective self-esteem," *European journal of social psychology*, 27 : 635–657.
- 加藤潤三・小杉考司・岡本卓也・野波寛, 2001, 「仮想世界ゲームにおける集団間葛藤——共通課題は仲を悪くする?」『日本グループ・ダイナミックス学会第49回大会発表論文集』, 200–201.
- 加藤潤三・岡本卓也・小杉考司・野波寛, 2002, 「仮想世界ゲームにおける集団間の衡平性——主観的衡平性と客観的衡平性」『日本社会心理学会第43回大会発表論文集』, 656–657.
- 加藤潤三・野波寛・岡本卓也・藤原武弘, 2005, 「仮想世界ゲームにおける環境問題重視型ルールの考案」関西学院大学社会学部紀要, 98 : 69–79.

- Karasawa, M., Karasawa, M., & Hirose, Y., 2004, "Homogeneity perception as a reaction to identity threat : Effects of status difference in a simulated society game," *Euro-pean journal of social psychology*, 34 : 613-625.
- Klein, O., & Azzi, E. A., 2001, "The strategic confirmation of meta-stereotypes : How group members attempt to tailor an out-group's representation of themselves," *British journal of social psychology*, 40 : 279-293.
- Kramer, R. M., & Brewer, M. B., 1984, "Effects of group identity on resource use in a simulated Commons Dilemma," *Journal of personality and social psychology*, 46 : 1044-1057.
- Luhtanen, R., & Crocker, J., 1992, "A collective self-esteem scale : Self-evaluation of one's social identity," *Personality and Social Psychology Bulletin*, 18 : 302-318.
- Mead, G. H., (Morris, C. W. Ed) 1934, *Mind, self, and society : From the standpoint of a social behavioris*, The university of Chicago press. (=1973, 稲葉三千男・滝沢正樹・中野収訳『精神・自我・社会』東京：青木書店.)
- McCoy, K. S., & Major, B., 2003, "Group identification moderates emotional responses to perceived prejudice," *Personality and social psychology bulletin*, 29 : 1005-1017.
- 宮原真由美・山岸俊男, 2004, 「外集団からのステレオタイプ認知と外集団同質性の認知」日本社会心理学会第45回大会発表論文集, 640-641.
- Sherif, M., & Sherif, C. W., 1969, *Social Psychology*, New York : Haper & Row publishers.
- Smith, E. R., Murphy, J. & Corts, S., 1999, "Attachment to groups : Theory and measurement," *Journal of personality and social psychology*, 77 : 94-110.
- Smith, H. J., & Tyler, T. R., 1992, "Choosing the right pond : The impact of group membership on self-esteem and group-oriented behavior," *Journal of experimental social psychology*, 33 : 146-170.
- 杉浦淳吉・広瀬幸雄, 1997, 「環境教育のカリキュラムとしての模擬社会環境ゲームの開発」『シミュレーション&ゲーミング』7 : 7-16.
- Swann, W. B. Jr., Pelham, B., & Krull, D. S., 1989, "Agreeable fancy or disagreeable truth? : Reconciling self-enhancement and self-verification," *Journal of personality and social psychology*, 57 : 782-791.
- Swann, W. B. Jr., Milton, P. L., & Polzer, T. J., 2000, "Should we create a nice or fall in line? Identity negotiation and small group effectiveness," *Journal of personality and social psychology*, 79 : 238-350.
- 垂澤由美子・広瀬幸雄・大沼進, 2001, 「社会の中のマイノリティはいかにして帰属意識を得るのか? ——仮想世界ゲームを用いて」『シミュレーション&ゲーミング』11 : 9-15.
- Tajfel, H., 1981, *Human groups and social categories*. Cambridge, UK : Cambridge uni-

versity press.

- Taylor, D. M., & McKirnan, D. J. 1984, "A five-stage model of intergroup relations," *British journal of social psychology*, 23 : 291–300.
- Tropp, R. L., & Wright, C. S., 2001, "Ingroup identification as the inclusion of ingroup in the self," *Personality and social psychology bulletin*, 27 : 585–600.
- Turner, J. C., 1981, "The experimental social psychology of intergroup behaviour," Turner, J. C., & Giles, H.eds., *Intergroup behavior*, Oxford : Blackwell, 66–101.
- Turner, J. C., Hogg, M. A., Oakes, P. J., Reicher, S. D., & Wetherill, M. S., 1987, *Rediscovering the social group : A self-categorization theory*, Oxford, UK : Basil Blackwell. (=1995, 蘭千壽・磯崎三喜年・内藤哲雄・遠藤由美訳『社会集団の再発見——自己カテゴリー化理論』東京：誠信書房.)
- Vorauer, J. M., Main, K. J., & O'Connell, G. B., 1998, "How do individuals expect to be viewed by members of lower status groups? Content and implications of meta-stereotypes," *Journal of personality and social psychology*, 75 : 917–937.

# Social Identity and Meta-stereotype of Members among Groups on the Basis of Achieving a Superordinate Goal

Hiroshi Nonami\*

Junzo Kato\*\*

Takuya Okamoto\*

Takehiro Fujihara\*

## ■Abstract

A meta-stereotype, that is, the evaluation by outgroup members of an ingroup, occurs through mutual observation between groups in a context in which they cooperate to achieve a superordinate goal. Self-verification through the use of a reflected self is a factor in establishing a personal identity, but if the same process works in an intergroup context, a meta-stereotype would lead people to accept their ingroup and social identity. This social identity would not correlate with the meta-stereotype among members of a superior group, but it is predicted that these two variables would be connected among members of the inferior group. The results of an experiment using a Simulated International Society Game (SIMINSOC) supported these two hypotheses. Based on this informationresult, I we make the theoretical argument that searching for a connection between the meta-stereotype and social identity could contribute to the study of group awareness.

Key words : superordinate goal, meta-stereotype, social identity, SIMINSOC

---

\*Kwansei Gakuin University

\*\*Osaka International University